

造

形

JOURNAL

VOL. 64-1

2019

No.435

開隆堂

※本資料は「教科書発行者行動規範」
に則り、配布を許可されているも
のです。

特集

見方が変わる・世界が変わる

～カラダとコトバで紡ぐ鑑賞～

美術館探訪

秋田県立近代美術館



しんかい じょうけい
深海の情景 (油彩、カンヴァス、129.0 × 161.0cm) 1933年

こがはるえ おおはら
古賀春江 (1895 ~ 1933) 大原美術館蔵(岡山県)

※表紙写真は作品の部分拡大図です。

古賀春江が求めた 芸術の純粹性とシュルレアリスム

宇都宮大学教育学部 准教授 ^{ほんだごろう} 本田悟郎

1933年の〈深海の情景〉は、古賀春江の遺作とも呼べる最晩年の作品である。38歳で早世したこの画家は大正期よりキュビズムやパウル・クレーなどから影響を受けて前衛的探究を始め、1929年の二科会第16回展では代表作ともいえる〈海〉を発表し、同会とうこうせいじ あべこんこうの東郷青児や阿部金剛らとともに日本におけるシュルレアリスム受容を先駆ける存在であった。1929年から1933年というごく短い期間にシュルレアリスムに関心を寄せたが、この間、病に冒されながらも、シュルレアリスムを通して芸術の深淵を見つめようとした。古賀は『超現実主義私感』において次のように述べている。(註1)

「超現実主義は純粹性どうけいへ憧憬する意識的構成である。(中略)対象は何所までも意識を通して計算されるものであつて現実的意味を持たなくなる。現実的形式ではなくて芸術的形式である。例えば、描かれたる机は机自身の形ではない。具象的現実としての机ではなくなるのである。」

ここで古賀はシュルレアリスムを理論化するとともに、芸術とその純粹性は、人が意識し、思考するプロセスにおいて生成されることを述べているが、しかし、続けて次のように考察している。

「対象としての現実的表象が、その意味を持たなくなつた所から芸術は始まる。作者の影も同様に薄くなる。ここに作者がいると思わせる作品はまだ純粹ではないのである。純粹の境地—情熱もなく、感傷もない。一切が無表情に居る真空の世界、発展もなければ重量もない。全然運動

もない静寂の世界！」

〈深海の情景〉は、マックス・エルンストラフランスにおけるシュルレアリスムの手法ならに倣い、当時のグラフ雑誌や児童書などから既成の図像を引用しコラージュ的構成をして描かれたものである。物と物との偶然の出会いとその対比から新たな意味を創造するシュルレアリスムの捉え方から、古賀はさらに自身の芸術観に踏み込み、最期のキャンバスに向き合ったのであろう。コラージュ・ペインティングによる最晩年の本作品では「作者の影」が極限まで薄められた。貝と猫頭の裸婦(女神)、植物と生物、魚、帆船等が平面的に描かれ、暗闇のなかに漂う。しかし、この静寂に満ちた深海の世界に差し込む上部の光は、この画家が何かに辿り着くことができたことを暗示するかのようでもある。

親交の深かった川端康成かわばたやすなりは『末期の眼』のなかで古賀春江の死に際し、その芸術観を次のように評している。

「古賀氏の絵に向ふと、私は先づなにかしら遠いあこがれと、ほのぼのとむなしい揺らぎを感じるのである。虚無を超えた肯定である。」(註2)

ここに、「作者の影」を極限まで消し去り、古賀が追い求めた、芸術の純粹性を見ることができないのではないだろうか。なお、本作完成時のサインは、病に伏し衰弱した古賀に頼まれ、友人の高田力蔵たかだりきぞうが代筆で入れたという。

註1 古賀春江「超現実主義私感」『アトリエ』アトリエ社、1930年1月
註2 川端康成「末期の眼」『現代日本文学大系52川端康成集』筑摩書房、1968年11月

Contents vol.64-1 No.435

特集

見方が変わる・世界が変わる

- ～カラダとコトバで紡ぐ鑑賞～【立川泰史】……………04
- ・比べてみる・はなす【奥山美香】……………08
- ・「あつめて・みる」鑑賞の授業から【河野路】……………10
- ・じゆうに、みる【大曾根朝美】……………12

表紙の1枚 古賀春江「深海の情景」【本田悟郎】……………02

授業の役に立つ！ ICT 活用法

マインドマップで考えをまとめよう【北川智久】……………14

コラム ちかごろ気になる… ……………15

- ・ガネーシャは日本にもいる！？【後藤保紀】
- ・造形あれこれ【池田天】

美術館探訪 秋田県立近代美術館 ……………16

教材研究【小学校】

自分を守る鬼瓦をつくろう【東奈美子】……………20

教材研究【中学校】

ディベート—芸術の価値とは何か—【菅原由美子】……………22

見方が変わる・世界が変わる

カラダとコトバで紡ぐ鑑賞

「みる」ことの底力

「みる」ことは「わかる」こと。「わかる」ことは「わかる」こと。

こんなフレーズを聞いたことはありますか？ この考え方は、人が世界を知る仕組みを知的ロボットに授けようとした当初、情報処理のモデルになったそうです。ところが、この力をロボットに授けようとすればするほど、わかったのは皮肉にも人の凄さでした。たとえば、コーヒーの注ぎ口に紙コップをあてます。その軌道をとる間に、人は微小な失敗を無数に繰り返し、軌道のズレを修正しているそうです。しかも注ぎ口らしい場所をただけでなく経験則で判断しています。このように微小な失敗を処理する力は、幼児が積み木バランスをとるときにも使われま

す。無数の微小な失敗から「当座の答え」を繰り出す力、それが深い学びの源だという議論もあります。また、点々と散らばった知見を結んで新しい理解を編むように、「学びは本来つまみぐい」という認識も高まっています。「みる」という鑑賞の力も、こうした力と無縁でないように思います。

カラダで「みる」

「みる」ことは、目だけの仕事ではないというのもよく聞きます。確かに「みている」のに「みえていない」ことがあります。また、触察といわれるように、さわってみると「みる」以上のものが「わかる」ことがあります。仮に、「みる」ことは全身の仕事なのだとしてみましましょう。すると、私たちは「もの」だけを切

り取ってみているのではなく、目の前にある「もの」が置かれている場所や明暗など、対象を囲い込む「こと」全体をみているような気もしてきます。

みる「もの」には誰が見ても共通した形や色がありますが、みる「こと」には場所の雰囲気や印象など、各自が感じた固有のイメージがまわりつきます。それをのりしろにすれば、初めてみるものでも自分の知っている風景の中に馴染ませてしまうことができます。こう考えると、「みる」ことは「わかるう、納得したい」という目的に方向づけられた心身の運動ということになります。これはたとえば「見分け」ならぬ「身分け（みわけ）」「身知り（みしり）」（市川浩、1993）と呼ばれたり、カラダで知った経験に重ねてみると

いう意味で「模倣の演技」（上村博、1998）などと呼ばれたりすることもあります。

「わけて」みる

では、冒頭にあげたように、「わかる」ことがなぜ「わかる」ことで果されるのでしょうか。

私たちは「記憶」という使い勝手のよい備忘録をもっています。この備忘録は、初めてみるものでもなんとか理解することに役立つと思います。ある匂いを嗅いだり、ある音をきいたりしただけで、記憶のページが一気にめくれ上がることがないでしょうか。それは、どんなに分厚い備忘録（記憶）でも、カラダで体験した感覚を選り分けた「見出し」をもっているからに他なりません。感覚に彩られた既存のイメージと今み



ているものを結ぶため、記憶は自分の役割を分担して待ち構えていることとなります。飛び込んできた情報も、この「見出し」に誘われて受け入れられます。「わかる」はまさに、今みることで、一度身をくぐった感覚や認識との相互作用を象徴しています。

一瞥^ぺでみてしまおう価値

詩の行間に情景を思い浮かべたりするのは不思議なことです。造形作品に限らず、地図や天気図は、一瞥のうちに数字に溺れている事実を感覚的に捉えられるようにしてくれま^す。美術史家のホルスト・ブレードカンブ（2019）はこの「一瞥」の価値に気づいて、いっさいの造形の潜在力を「S字線」で表そうとした画家デューラーやクレーラを紹介しています。

ここでマークしたいのは、「みる」ことはまず、全体を一瞥する相貌的なイメージに支えられるということや、みえない動き、きこえるはずのない音や仮想世界をも積極的に「み

てしまう」ことです。感覚に伴奏されたイメージは想像的でより深い理解を促してくれるでしょう。

発想の「のりしろ」

「みること」が感覚や記憶の助けを借りて想像を膨らませるというなら、いったいどのようなプロセスを踏むのでしょうか。

やっかいなことに、呼び出し用のインデックスとなる印象やイメージも完璧ではありません。あるときは関係ない記憶に飛んだり、多数のイメージが重なったりして、結局あやふやな輪郭を残すこともあるからです。ところが、あやふやな輪郭こそが「のりしろ」となって関係ない所に飛んだり、無縁な感覚や記憶とリンクしたりすることがあります。この無縁なものとの「縁結び」こそが、新しい認識をひらくプロセスです。その昔、想像が「趣味、戯れ」と呼ばれたことを思えば、このような見立ても本当らしさを感じます。例えば、実際に「みたもの」が不可解なほど新しいと、私たちは「見出し」



の項目を増やさずに、強引な落ち着き先を選ぶことがあります。こうして、わずかな類似点を手がかりに「わがろう」とするのが、いわゆる「比喩」の発想です。「みること」が「わかる」に方向づけられているというのが前提ならば、比喩の発想は「わからない」ものを「わがろう」と試す行動だといえるでしょう。あるいは、わざと違った「みかた」を期待するときの「遊び」ということもできるでしょう。前者は、「おおむね」のよくな」というプロセスで、見立て（直喩）のイメージを生みます。一方後者は、「みたもの」が無縁だったものに喩えられ、「〜であってもおか

しくない」という暗示に富んだイメージ（隠喩）を生みます。隠喩的な発想は、半分人間で半分魚の「人魚」というような、見た目にも斬新なイメージをも可能にします。古くは「ことばの彩り」としか思われなかった比喩の発想が、実はみること独自の「わがろう」に

も当てはまるという指摘もあります（山梨正明、2012）。新たなものが「みえてくる」想像力、経験に裏打ちされたイメージの誕生、その両者を切り離せないものとみる信念が、こうした指摘の拠り所になっています。わかりやすくいえば、生身の体をもつ私たちの想像力はたくましく、かつそれをごく当然にしているということなのです。

期待に満ちたイメージ工場

今日わかってきたのは、「みる」ことと「わかる」ことの間には、イメージをじわりと現像する中間工場があるらしいということです。たとえば

不可解な図柄でも、感覚で受け取ることができません。ところが、みる側も「こんなものであるはずだ」という期待を差し向けます。この「内側から出動する期待」と「外から来る感覚」が合流する地点でイメージは現像されるということです。この話を紹介する美術史家カール・クラウスベルク（2019）の言葉を借りると、「最善のイメージ」がそこで形成されるということになります。イメージは一瞬で誕生するのではなく、申し分のないものになるための「前庭」ともいべき成熟期間をもつということです。

コトバ

私たちのライフ・ストーリーはそれぞれなので、目立ってみえるものも、背景に退くものも違います。その時々々の注意に左右される「図と地の関係」はみる度に、みる人ごとに異なります。

しかし、私たちが出会う表現は、共有する習慣や風土が生んだ様式の中で育ったものです。異なる解釈が

飛び交う多声的な対話もその様式を尊ぶ限り、価値を感じるものになるはずですが、また、その中で少しずつずれていく感じ方があるからこそ議論は続けることができます。作品のよさもまた、身をくぐった理解や感性が広げる語りの中で、わかり合えるコトバになるのではないのでしょうか。

みえるつもりになってみる

「みる」「わかる」「わかる」またはイメージが「育つ場所」を保障する鑑賞題材では、どのような子どものかを描くことができるでしょうか。

もろもろの感覚を使って「みる」力は、造形遊びで材料にファーストタッチする場面で自然に発揮されています。ひねる、やぶくといった技で、世界を捉え返すカラダの逞しさを実感します。こうした機会を造形遊びから独立した鑑賞題材として設ける意義は、全身で「みる」幼児体験を増幅していくところに期待することができます。

世界を捉え返すカラダ

他方で、無縁なものに「似ているところ」を見つけてつなぎ合わせていく遊びが、隠れていた美しさを探る感じ方を養うことがあります。ごく身近にあるものの使い方を忘れてみる」とさまざまな「こと」が「みえてくる」ことも多いでしょう。こうした鑑賞の舞台にのせるだけで、無縁だったものに「のりしろ」を発見するきっかけになります。たとえば「ごっこ」遊びのように、嘘を承知で結びつきを楽しむことができれば、比喩的な発想の振り幅は格段に広がります。ならば、身近なものに似ているところに着目し、思いついたものに全身でなりきってみるといふ題材でも、カラダをくぐった理解や感性を生かす鑑賞として成り立つでしょう。

物語るコトバと誠実な目

さらに、みえないことを照らす感覚や記憶を生かす題材は可能でしょうか。

実際には鳴っていない音や匂いを「みる」には、作品にあてがわれた思想の枠組みや輪郭をほかす勇氣と自由さが望まれます。その原動力になるのが、形や色、イメージの印象を大胆に鑄直す「物語の力」です。現実の枠を超えるフィクションの力を生かして自分の感じ方に引き寄せ、自由な物語をかぶせていく活動です。各自のオリジナルストーリーに演出される音や匂いを登場させる活動は、感じ方の違いやよさを象徴するコトバや語りを生み出します。一方では、その物語を友だちに受け入れて貰えるものにする「誠実な目」が求められるでしょう。

比べると、みえてくる

また、高学年の子どもたちは、隣り合ったものの違いや重なりを容易に見つけることができます。普段は比べられるはずのないものが並んだとき、子どもたちは分析的な眼差しを武器に、相手の外面や内面をなぞっていきます。たとえばキャンパスを引き裂いたようなルーチョ・

フォンタナの絵画作品とアルベルト・ジャコメッティの細長い人物彫刻が並んだとき、子どもたちには何が「みえてくる」のでしょうか。

知ろうとするとわかること

比べてみるという鑑賞方法は、作品の出自にかかわる事情や風土を知ることにも興味を高めますし、論理的な推察と生活美を認める感性を結ぶことを期待する題材として展開することもできるでしょう。それは、異文化を越えた理解や批評的な目を培い、文化的な社会に参加する意識を育む活動として位置づけられるかもしれません。

鑑賞題材のコンセプト

ここまで、みるものや触れるものの目を借りて味わう題材、比喩や物語による直感的な感じ方を生かす題材、造形的な特徴を比較や批評などを用いて読み解く題材などを検討してきました。これらのコンセプトを端的に言えば、材料に触れ「つくって・みる」、ひらめいたものに「なっ

て・みる」、お気に入りを入りを「あつめて・みる」、作品に隠れた音を「きいて・みる」、似てない作品を「くらべて・みる」、異文化の主題を想像し「しつて・みる」などのようになります。
結局、「みる」ことは「みえてくる」まで楽しむこと、自他の企てや遊びを結び語ることに没頭することだと思われまふ。そして、カラダをくぐった理解はコトバのカーニバルを通して、鑑賞に底知れぬスリルと喜びをもたらしてくれる気がします。

参考書籍

- ・市川浩「へ身」の構造 身体論を超えて」講談社（1998）
- ・上村博「芸術と身体」昭和堂（1998）
- ・山梨正明「認知意味論研究」研究社（2012）
- ・カール・クラウスヘルク「神経美学の〈前形態〉」坂本泰宏ほか編「イメージ学の現在」東京大学出版会（2019）
- ・ホルスト・ブレーテカンフ「イメージと自然との共生」ネオ・マニエリスムについて考える」坂本泰宏ほか編「イメージ学の現在」東京大学出版会（2019）



立川 泰史
（たちかわ やすし）
東京家政学院大学
准教授

比べてみる・はなす



「う～ん、比べてみるとどんな発見があるかな。」

何かを見ている時、体験している時、子どもは常に興味というアンテナを張り、目の前のものが「何なのか」を必死で探ろうとしている。その何かを探る際に、「比べてみる」という視点が有効だ。

人は対象を観察する際に無意識に「同じところ」「違うところ」を探している。高学年の子どもにも、二つの隣り合う名画を「比べる」という視点を与えると、目の前に提示されている二つの名画の「共通点や相違点」が際立ってみえてくる。

まずは「形」「色」等の簡単なことを入り口にして話すと、どんな子どもでも話しやすい雰囲気になる。「二つとも赤色があるね。」「こっちは丸い模様が多い。あっちはカクカクした線がかかっているよ。」「等、子どもは「みえたもの」について話してく

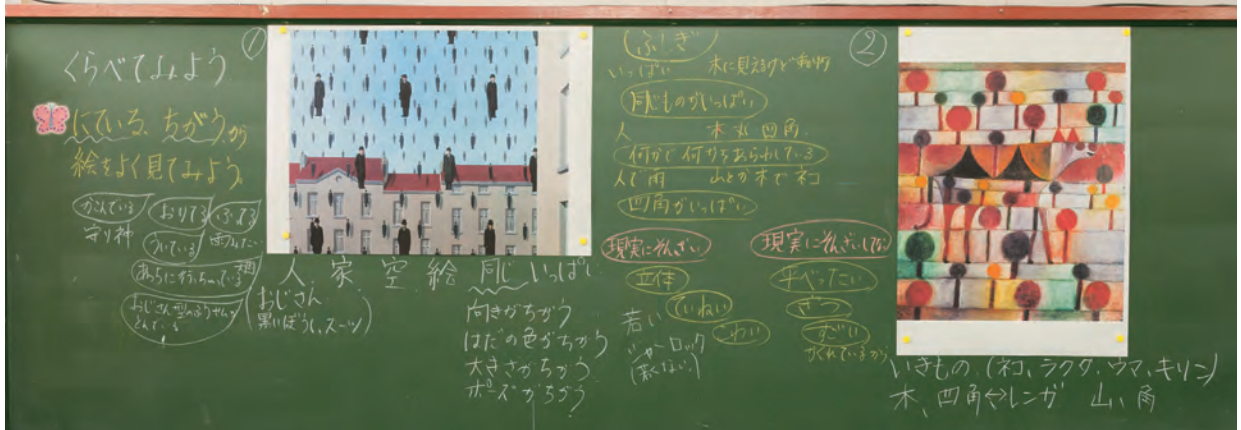
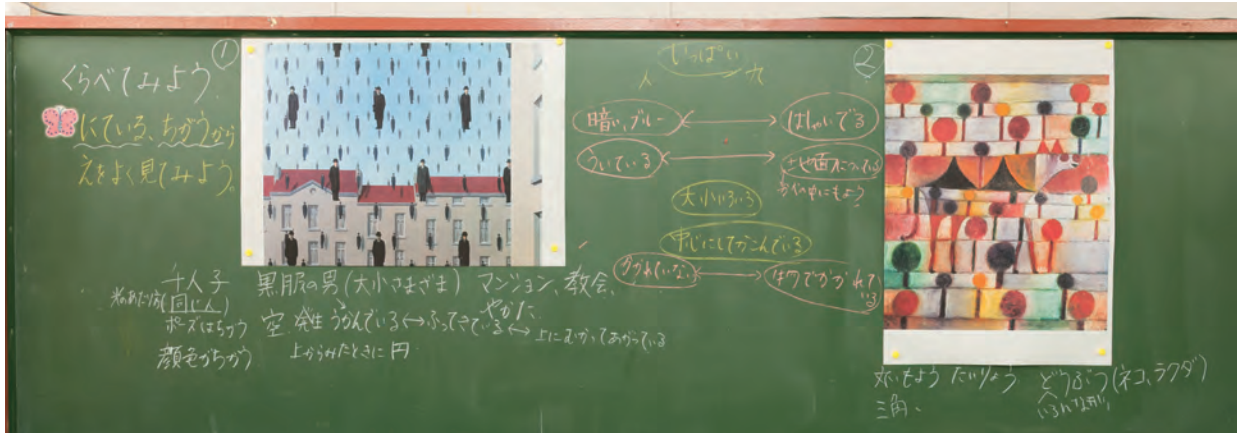
れる。

そして、その後で教員は「感じとったこと」へと子どもの視野を広げることが大切だ。ここでは教員の問いかけをきっかけにしてもよいし、偶然「感じとったこと」を発言した子どもの言葉をみんなで掘り下げるのもよい。大切なことは、子どもが「目にみえない風、音、匂い等の五感を働かせて感じること」「自分の過去の経験と結びつけて感じること」「想像を広げて予想してみること」だ。

「こっちは古臭い感じ。あっちは派手で新しい感じ。」「色の感じが和風と洋風で違う。」「こっちは、知っている動物がいるから現実の世界。あっちはぼんやりしていて見たことな



友だちとどの作品を見比べようか相談中。



同じ題材でも、クラスによって子どもの感じることはこんなにも違う。

い動物がいるから想像の世界。」と、子どもはさまざまな発見をする。感じとったことを自由に発言できるように、はじめはクラス全体で対象物を比べてみて話すのが有効だが、慣れてきたら二人で複数の名画からどの2作品を比べるか相談し、比べて見つけたことをワークシートに書いてみる等、活動を広げていくことをお勧めする。

私が子どもと「比べてみる」ことを通して感じたことは二つある。一つ目は、「比べる」ということは対象物を単体でみるよりも、より新たな発見があること。二つ目は、子どもは対象作品の「共通点や相違点」を見つけて発言するとともに、自他の考えの「共通点や相違点」も感じていること。対象作品を比べ、自他の考えを比べる中で、子どもは自分という「個」をより明確に感じられるのではないかと感じた。



奥山美香
(おくやま みか)
東京都板橋区立
富士見台小学校
主任教諭



「似ているところや違うところを探して書いてみよう。」



「二人で比べてみて、発見したことを発表しよう。」

「あつめて・みる」鑑賞の授業から



日頃見慣れた風景。そこには普段なんとなく目にはしているものが周囲に溢れている。しかし、いつもとは違う見方・感じ方でそれらと向き合った時、見慣れていたはずのものの中に、今まで気がつかなかったいろいろな特徴や魅力があることに気づくことができる。

小学校3年生で鑑賞の授業「集めて、ならべてマイコレクション」を行った。校庭に出て、身近な場所から気に入ったもの、気になったものを集めて、空き箱に並べる活動である。

鑑賞は視覚的に捉える活動だと思われがちだが、形、色、構成、手触り、音、匂い、量感、質感等、さまざまな感覚を働かせて感じ取っているものである。そして、新たに感じ取ったものをこれまでの記憶と重ね合わせたり、つき合わせたりしながら



小石の手触りを友だちと共有しながら集めている。

ら、多義的・多元的にそのものを認識して、自分の中に位置づけていく。

「ツルツル」「ほんのりあったかい」「ゴツゴツ」「冷たい」と石をいくつも集めている子、「ふんわり」「重いと重さを確かめる子、色に注目して風にそよぐ黄色や黄緑色の植物を集



「いいな」と感じたものの組み合わせや置く場所を何度も試している。

めている子。子ども達はそれぞれ自分の感覚を働かせて、「いいな」と感じて・みたものを、それぞれ見直し



たときに、単体だけでは気づかなかつたよさや美しさ、心地よさをあらためて発見していた。

そうして集めてきたものともとの響き合いを考えながら、自分のコレクションを箱に盛り込む。

景色に見立てて集めたものを配置した箱、数種のフワフワした感触を味わえるようにした箱、葉を皿に見立てて味を想起させるような盛りつけをした箱、内側と外側で飾る材料を分けた箱。子ども達は自然に友だちと見せ合いながら、細部をみたり、離れて全体をみたり、触ってみたりと、さまざまな方法や角度で鑑賞し、互いの見方を共有していた。

「あつめて・みる」鑑賞によって、個々への認識から全体の捉えまで、



互いの作品を見合うことで、対象への捉えがより広がる。

子ども達の鑑賞が広がっていった。これまで感じていたものとは違う側面を引き出し、自分で意味づけしたものが形になっていく。「あつめて・みる」鑑賞は自分の表現を展開していく起点になっていた。

鑑賞は視覚的な「みる」だけではなく、多様な感覚を働かせて感じたこととこれまでの認識を重ね合わせる中で、新しい見方が生まれてくる。統合的な「みる」行為である。本題材を通して、個々の比較や、全体と個の関係性から、自分の視点で集め



てきたものに対し、これまでとは違う意味づけをし、自分の表現が開かれていった子ども達の姿が見られた。

図工の時間の子どもたちの対象への捉えは、記憶として重なり、子ども世界の認識を実感を伴って深め広がるものであると感じた。



河野路
(こうのみち)
東京都東村山市立
南台小学校
主任教諭

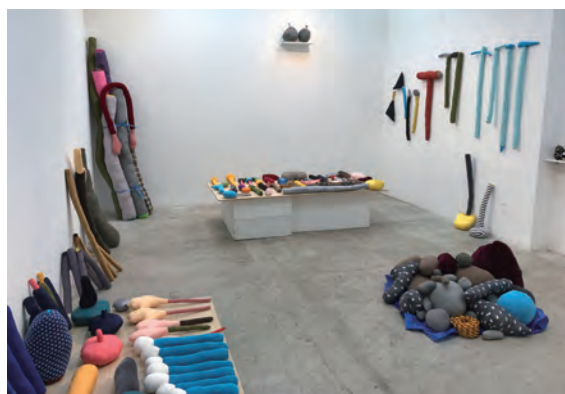
じゆうに、みる



「dear Me フェス！— 越境するアートとフクシから考える、子どもと私の豊かな学びの場—」
(東京都)、2018年 (左上とも)

わたしはこれまで、だれかの着古した衣類などを縫い合わせた大量のぬいぐるみ型作品を制作・発表してきました。今からおよそ10年前、わたしがいた美術の世界には、作品の前に『手をふれないでください』『立ち入らないでください』などといった禁止事項が並んでいて、作品の前に立つたびに窮屈な気持ちになりました。そのような体験から、自分の作品では禁止事項を全てなくそうと思い、手に取ることができる、自由に体験できる作品を発表しています。

ひとつのものが完成したとき、「この形は〇〇に似ている。」「この色の組み合わせだったら△△に見える。」と思うことがあります。つくったものが、だれか・なにかに似ている気がしていて、そのことがひっかかっています。しかしそれは、自分も



個展「おすそわけの里をひらく」(宮城県)、2018年



「ゼロダテ少年芸術学校 2018」(秋田県)、2018年



意識していないところで、特定のだけか・なかのイメージに寄せて制作していたからなのかもしれません。

わたしの制作方法は、色の組み合わせを決めることはなく、形も決めるので型紙もありません。手に取った布の上にミシンの針を自由に走らせて、縫い合わせた生地を裏返して綿を詰めた瞬間に、自分でも想像していなかったものに出会

ることをいつも楽しみにしています。はじめから何も決めないという制作方法は、自由すぎて難しいと思うことがたくさんあります。しかしそこでつくることをやめてしまつては、何も生まれません。だからこそわたしは「難しい」を乗り越えるためにもつくり続けます。それは新しいひらめきにつなげるために大切なことなのだと思います。またそれは、「楽しい」「うれしい」「おもしろい」体験につながっていくのかもしれない。

これまでの発表の場では、作者であるわたし自身の想像を越えるた



くさんの瞬間に出合うことができました。子ども達は手にしたものに名前を与えて使い方を考えたり、もの同士を組み合わせで新しいなにかをつくり出したりします。なにかのイメージをもつてつくっていないものでも、「これは〇〇」「これは△△」と新たな名称や想像もしていなかった用途が与えられていく様子にはいつも驚かされます。

作品体験は、ひとりひとりにとって特別であつてほしいと考えています。だからこそ、わたしの作品の中では自由に過ごしてほしいと思つています。



大曾根 朝美

(おおそねともみ)

アーティスト
作品を身体に巻きつけて街を練り歩いてもらう、作品を道ばたに落として拾つてまた別の場所に落としてもらうなど、鑑賞者を巻き込む方法で作品を展開している。2018年に個展「おすそわけの里をひらく」(仙台)を開催。その他「おすそわけのフエス」(2018年、東京)、「ゼロダテ少年芸術学校2018」(2018年、秋田)などへ出展。

マインドマップで 考えをまとめよう

筑波大学附属小学校 教諭 北川智久 (きたがわ ともひさ)



私が図工の授業で「気軽にICT活用」している方法をいくつか紹介します。

かきたいこと・ つくりたいことをみつける

図1は、「図画工作」教科書に載っている題材のタイトルです。子どもたちが、「自分が好きなことは何か？」ということを見つけやすくなるような板書をイメージしていますね。このように、自分の考えをマッピングすることは、子どもたちにとっても大人にとっても意味があります。

図2は、3年生が書いた「わたし」についてマッピングしたときのメモです。このメモは書き足しや書きかえもできます。図工でつくるもののメモとしても、作文のメモとしても役に立ちます。



図1 開隆堂出版「図画工作」教科書1・2年下 p.8「好きなことなあに」タイトル

授業のアイデアを メモする

私は、電車で通勤しています。混雑した車内でも、スマートフォンなら操作できます。今日の授業をどうしようか、研究授業のアイデアをどうしようかとマッピングを使ってメモをしています。アイデアメモを溜め続けて、日々の授業に活用しています。

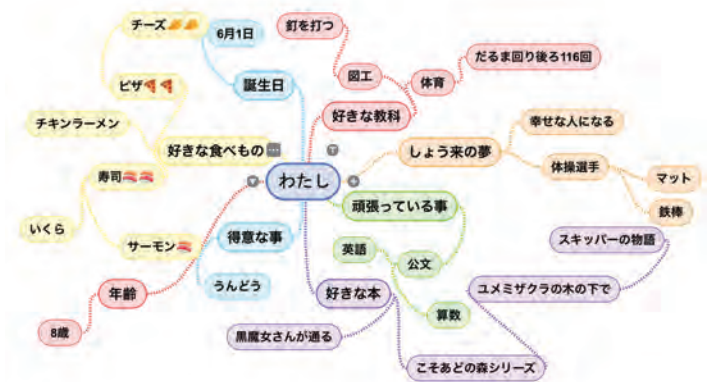


図2 3年生児童のマッピングのメモ

板書として使う

使い慣れてくると、モニターにつなげて板書として使うこともできます。手元のスマートフォンに書き込むだけなので、子どもと対面しながら背中を見せずに、板書ができます。音声入力もかなり正確に入力できるようになったので利用しています。「先生、その意見は、もう一つ上とくつつくよ」のような子どものつぶやきでマップを変更するのも簡単です。図3は、紙コップと透明カップにシールを貼って、カップを重ねてずらした時の動きを見立てたものです。

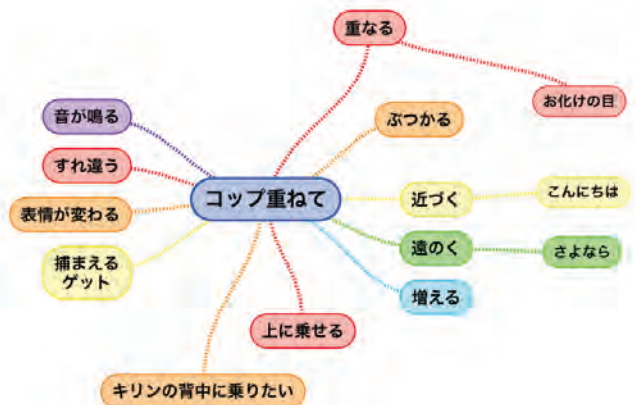


図3 授業の板書に使ったマッピングのメモ

ちかごろ気になる...



ガネーシャは日本にもいる！？

太田国際学園
ぐんま国際アカデミー中高等部
後藤 保紀 (ごとう やすのり)

埼玉県熊谷市にある自宅から群馬県太田市の学校に通う道中に、妻沼 聖 天山歓喜院というお寺があります。お寺は利根川より1kmほど南に位置しています。本殿(国宝)は有名ですが、“最近気になった”のは御本尊の秘仏「御正体錫杖頭(重文)」です。平成も最後の31年4月に御本尊が23年ぶりに公開されました。公開前の1月に私が本殿を拝観した際に、解説の方が一般の人にもわかりやすく「ご本尊の秘仏はガネーシャ*です。」と教えてくれました。日本のガネーシャはどのようなスタイルをしているのだろうか？ 実は昨年度まで家族がバンコクに住んでおり、頻繁に行き来していた私にとってガネーシャはよく目にする身近な存在でした。昨年訪れたプランバナン寺院(インドネシア)のそれも記憶に新しいところです。

さて、実際に公開された御本尊を拝観してみると…、なんと二体がハグをしているではありませんか。二度見どころから回は振り返ってしまったことを覚えています。私

の勤務校は英語が公用語でインド出身の教師が在籍しており、彼ともよく話をします。彼はガネーシャが仏像として日本のお寺に安置されているのを知って喜んでいました。御本尊は秘仏のため、ウェブサイトで似ている画像を彼に見せた時の「インドのよりスリムだね？」「色がないの？」「二体は何をしているの？ 相撲？」といった気軽な会話は、美術の形式的要素に満ちているので驚きです。密教仏としての説明は、それぞれの文化的価値観を考慮して省略しましたが、ガネーシャという入り口は私なりの仏像彫刻の楽しみ方を広げてくれました。ちなみに本殿のレリーフは中国が舞台で、アジアの雰囲気満載です。

本校から比較的近い妻沼 聖 天山歓喜院を用いて、国際バカロレアの視点も入れた「日本でアジアを感じるができる美術の教材」にできな
いかなと、毎日のように利根川を渡りながらアイデアを温めています。



*ガネーシャはヒンドゥー教の神の一柱。
秘仏の歡喜天はガネーシャに起源をもつ。



造形あれこれ

愛媛県西予市立城川小学校
池田 天 (いけだ たかし)

造形遊びが提唱された頃、パレットの絵の具を流すだけで、子ども達にとっては大きな意味があると言われていた。また、今は影を潜めていったペスト状ののりを手にすることは、その触感を味わうだけでも意義深い、と言われたことを思い出す。

低学年児童が紙工作をする場合、手取り早く接着したいのか、やたらとセロハンテープを使う。造形として見た目の美しさを考慮すると、その接着部分に違和感を感じていたこともあったが、子どものつくりたいという思いを考えると、これも許容範囲なのかもしれない。

使用する素材や接着剤も、時代とともに多様化してきている。手を汚したくない子どもが使うスティックのりもその一つだ。そうした新しいものにチャレンジさせる中、古きよき時代の素材に触れさせることも大切である。物があふれる時代だからこそ、教える側が目的意識をもって、素材を選択して授業に臨むことは大切だと感じる。

指導案に使う用語について、先輩の先生から教えていただ

いたことも心に残っている。よく使われている「アルミ箔」。正式には、「アルミニウム箔」と言い、「アルミホイル」は商品名になる。話すときは、「ホッチキス」とよく言うが、表記は「ホチキス」。普段使うときは「紙ガムテープ」と言うが、正式には「クラフトテープ」。これらのことも意識するようにしている。

造形は自由に行われるものであるが、生活を美しく豊かにする働きをもっている。今後も美術文化を深めていけるように、学習の充実を図っていきたい。





秋田県立近代美術館

開館25周年

「感性豊かな美術風土の
形成をめざして」

秋田県立近代美術館は、1994年4月20日、県南部の横手市よこてに開館し、今年25周年を迎えました。

広く人々に親しまれる美術館を目指し、展示事業を始め、仲町啓子館なかもとけいこ長による館長講座、講演会、ワークショップ、ミュージアムコンサートなどの取り組みを行っています。収集事業では、近代以降の優れた美術作品を中心に、本県出身及び秋田ゆかりの作家の作品や、近・現代美術の思潮をたどる上で必要な作品・資料を収集しています。

当館は、県内の伝統工芸や食文化などを総合的に楽しめる施設「秋田ふるさと村」の敷地内にあり、東には奥羽山脈おくう、西には出羽山地でわと鳥海山とりのうみを望むことができます。かまくらをイメージした入口と空を映す巨大なガラス壁面を生かした建築が印象的です。1階から5階へと続く全長約40メートルの展望エスカレーターは外の景色を眺めながら移動するこ



展望エスカレーター



キッズルーム



展示の様子



あんどういずみ
安藤泉 「好奇心」 1998年
(銅、真鍮、鍛金ステンレス骨組み 570.0 × 160.0 × 570.0cm)

秋田県立近代美術館

〒013-0064

秋田県横手市赤坂字富ヶ沢 62 - 46 (秋田ふるさと村内)

TEL : 0182-33-8855 FAX : 0182-33-8858

Email : akitamama@rnac.ne.jp Twitter : @akitamma

開館時間 : 9:30~17:00 (入館は16:30まで)

休館日 : 2019年12月29日~12月31日の3日間
(年末休館)

2020年1月14日~1月23日の10日間

(メンテナンス休館)

上記期間以外は、すべて休まずに開館しております。



とができ、特に子どもにも人気があります。

「彫刻広場」、「彫刻の小道」、「彫刻の丘」など、自然の起伏を利用した野外展示スペースも見どころで、四季折々の自然の美しさを感じながら身近に32点の彫刻作品を鑑賞することができます。館内にも現在34点の彫刻を展示しています(展示替えあり)。

横手盆地を囲む山々を一望しながら木の遊具で遊べる7階のキッズルームも人気です。

多彩な展示と秋田蘭画

らんが

当館には5階と6階を合わせて約1800㎡の展示室があります。

独自の企画、他美術館・諸団体との共催により、広く内外の美術を特色あるテーマで展示しています。収蔵品は現在2,720点で、2019年度「コレクション展」ではテーマを変えながら年4期の展示を開催しています（展示替えあり）。
特筆すべきは「秋田蘭画」です。江戸時代中期、秋田藩主、藩士らが遠近法や陰影法など、西洋絵画の技



あめのみやけい こ そうしゅう
雨宮敬子「想秋」1989年
(ブロンズ/高さ180.0cm)

法と中国由来の写実的な表現を融合

させた作品群を生み出しました。近景を拡大し、遠景を小さく、かつ細密に描く独特の構図、奥行きのある空間表現などが特徴的です。コレクション展では、秋

田蘭画の中心的な

描き手、秋田藩士・小田野直武による『不忍池図』『唐太宗花鳥山水図』(ともに重要文化

財)などの秋田蘭画を無料で鑑賞することができます。

秋田藩角館かくのたてに生まれた直武は、本草学者・平賀源内ひらがげんないに才能を見出さ

れ、江戸に派遣された後、西洋画法を学んだ人物です。杉田玄白すぎたげんぱくらによる日本初の西洋医学書の本格的な翻訳『解体新書』の図を描いたことでも知られています。



小田野直武「唐太宗花鳥山水図」1770年代
(絹本着色軸装(3幅対)/各122.0×44.5cm) 国重要文化財

出前事業

当館のある県南地域から遠距離にある地域の方々にも所蔵品

を鑑賞していただけるよう、各地域へ出向いての出前展示や講座、県立図書館との連携事業を実施しています。



美術館に行ってみよう

当

館では未就学児、小・中学生、中学生以上一般を対象に全部で7つの美術館教室を開催しています。未就学児対象の教室では、造形作品として形に残すことを目的としない「遊び」を大切にしています。



夢中になって楽しみ、十分に満足感や充実感を味わえるようなローラー遊び、土粘土遊びなど、子どもの活動の根幹を支える教室を展開しています。



美術館のセカンドスクールの利用

秋

田県では、教育施設等のセカンドスクールの利用の促進を図っています。教育施設のセカンドスクールの利用とは、教育施設等の人的・物的機能を十分に活用し、学校と教育施設等が一体となって、郷土の自然や文化とのふれあい体験・共同生活体験、各教科や総合的な時間等の取り組みを複合的に実施する利用方法を行います。小・中学校、高校のみならず、幼稚園・保育所・認定こども園にも活用されています。

本物の美術作品と出会う体験、美術館ならではの空間で学ぶよさをふまえ、鑑賞や制作体験、探求・職業体験などのプログラムを展開しています。

「ふれんどりーギャラリー」は、子どもたちの作品展示や教員の美術教育実践発表の場として、また、美



術館教室講師の作品展示、横手市増田まんが美術館との連携展示など、多様な鑑賞体験・交流の場として活用されています。

(文・写真提供 秋田県立近代美術館)

教材研究
〔小学校〕

自分を守る鬼瓦をつくろう

■ ひがし なみこ 東 奈美子 熊本県熊本市立健軍小学校

6
年生

工作

4
時間



題材のねらい

「鬼瓦」のいわれを学び、自分を守る鬼について想像したり、考えたりして表したいものを工夫して作り出す力を培う。

用具・材料

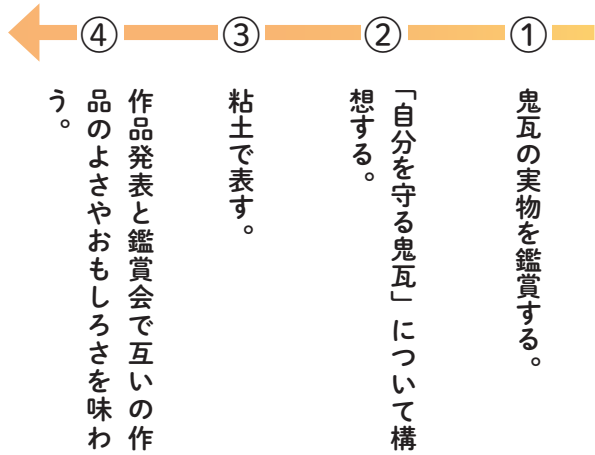
粘土板、粘土べら、竹ぐし、新聞紙、布、タオル、テラコッタ粘土（一人1.5～2kg、厚さが均等になるように準備）

評価の観点

- 関** 鬼瓦に関心をもつとともに、粘土の特性を知り表現することを楽しむ。
- 発** 古来より日本に伝わる鬼瓦について学び、自分を守る「鬼」の表現を考える。
- 創** 粘土の可塑性を生かして、指先や粘土べらなどの用具の使い方を工夫して表す。
- 鑑** 鬼瓦の実物を鑑賞し、表し方について学ぶ。また、子ども同士の作品のよさを味わう。



学習の流れ



本 題材は、図画工作、総合的な学習の時間、国語、道徳と横断的な学習を行うことで、日本古来より願いを鬼瓦に表す人々の思いや考えを学び、鬼瓦の形や美しさについて感じ取り、自分の願いをテラコッタ粘土を用いて鬼瓦の形で表現するものです。

鬼瓦は、古来より家を守る魔除けとして家に備えつけられる瓦です。城には、鬼瓦の一種である「鯰」が備えられています。熊本地震では、熊本県のシンボルでもある熊本城も罹災し、大天守閣6階の瓦が落ち、「鯰」も破損しました。2018年の秋、鬼瓦職人のかたが熊本城の「鯰」を完成させたという報道があり話題を呼

びました。そこで、鬼瓦を題材に、他教科と関連させながら、身近で日常に溶け込んでいる伝統文化を学び、造形活動にすることができないかということを考えました。

まず、国語と総合的な学習の時間で校区の環境について調べ、プレゼンテーションを行い、日本家屋が減ってきたことや屋根瓦について興味・関心をもちました。

次にゲストティーチャーを招き、本物の鬼瓦を鑑賞し、自分の思いを込めた鬼瓦の構想を考えました。鬼瓦職人のかたからもビデオメッ



セージを頂き、鬼瓦の歴史について学びを深めました。その後、テラコッタ粘土で自分を守る鬼瓦を製作しました。

指導のポイントとしては、家を守る鬼瓦という瓦を、構想図をかくことで自分を守る瓦として表すことを意識し、自分の思いを表現するようにしたことです。また、構想図をかいたことで、それをもとにしながら手早く粘土の造形活動に集中することができました。

子ども達は、目や鼻などのパーツを部品のようにつけたがりますが、目や鼻や角などは、土台の粘土からひねり出すように指導しました。

完成した鬼瓦は、校内造形展で全校児童に鑑賞してもらいました。展覧会では、鬼瓦に込めた意味について簡単なキャプションも準備しました。

他教科と関連づけて、日本の伝統や日常に溶け込んだ美、また、伝統を支える人々の生き方についても学ぶことができたと考えます。



教材研究 〔中学校〕

ディベート —芸術の価値とは何か—

菅原 由美子 宮城県大崎市立古川中学校

3
年生

鑑賞

3
時間



最終反論の場面
「この作品はバブル時代のピカソよりも評価されたことになる。それはなぜか？」

題材のねらい

オークションのニュースを糸口に、ディベートの手法を使って芸術の価値や社会の中での芸術の役割について考える。

用具・材料

タイマー、ワークシート、立論シート、ムンク作品図版、サザビーズニュース記事、数種類のムンク画集、数種類のムンク展カタログ等文献

評価の観点

関 作品の成り立ちについて興味をもち、作品の価値について考えることを通して社会の中で芸術が果たす役割について関心をもつ。

鑑 形や色彩などの作品を成立させる表現方法について読み取り、批評し合うことによって芸術作品の価値について考える。



作品を理解するためには、みんなで一度ムンクのパステル画を描いてみるとわかりやすい。

学習の流れ

- ① デイベートの方法について知る。
- ② 抽選で主張する立場を決定する。
- ③ 調査①ムンクの作品を分析する。
②作品の背景や生き方を知る。
③他作品との比較や資料調査。
- ④ グループで話し合って立論する。
- ⑤ デイベートする。
①肯定側立論 ②否定側立論
③作戦タイム ④質疑応答
⑤作戦タイム ⑥否定側反論
⑦肯定側反論
- ⑥ 授業の振り返りを行う。

「サザビーズでムンクの『叫び』（パステル画）が96億円で売れた。」というニュースが報道されましたが、それをもとに「96億円の価値がある／価値がない」という二つの立場でデイベートの形式を使って話し合う鑑賞題材です。デイベートの手法を鑑賞に取り入れようと考えたのは、生徒が主体的にたくさ



「ネガティブな感情もあるのが人間で、それは表現としてマイナスではない。」相手チームの立論から質疑を経て、相手チームへの鋭い反論を考える。

んの情報から必要なものをピックアップし、それを系統的に整理し論を組み立てることによって活発な言語活動が行われるだろうと考えたからです。

抽選で与えられた立場によってグループを編成しているの、個人の考えを一旦棚上げして先入観を捨てて調査をし、話し合いによって立論することになります。相手の立場の主張を論破するためには、相手側を納得させられる論の根拠となるものを資料から探さなければなりません。論の根拠となるものは、作品を構成する形や色などの造形的な特徴や画家としての生き方、他の画家との違い、芸術の値段と価値の関



作戦タイムでは何度も各班の立論を振り返って話し合う。

情報の正確さを判断しながら取捨選択するには膨大すぎると思ったので、あくまで補助的に使うように指示しました。

デイベートの方法は競技デイベートをもとにしましたが、競技デイベートにある審判は設定せずにデイベートの終結場面では授業を振り返って自分の考えをまとめるとしました。自分の考えを離れてチームとして論を展開し論争し合った後に、静かにもう一度自分の考えに戻って整理することで思考を深めることができます。

デイベートで鑑賞する授業は他のテーマでも試みているのですが、テーマを設定するときに対立項として話しやすい、何を争点にしたいのかが明確になる題材を選んでいきます。

係やズレ、芸術の意味、芸術が社会で果たす役割など多岐にわたります。今回の資料はネット検索によるものではなく、数種類の画集やカタログを使いました。ネット検索は検索結果に左右されやすく、

展覧会 レポート Pick Up Exhibition

東京都新宿区立
新宿西戸山中学校

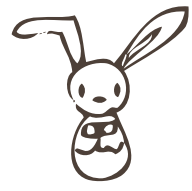


平面作品を吊るして展
示しています。空間の
有効活用です。

多目的室を使って美
術科の展覧会を行
いました。
一年間の集大成です。



展示の準備はもちろん生徒たちも行います。安
全に展示できるように脚立を使うときは三人
で役割を分担しました。



プロジェクトを使って授業の様子
を展示しました。授業風景の写真
を続けて映し、アニメーションの
ようにつくりました。



開隆堂出版株式会社

本社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎ 03-5684-6111

北海道支社 〒060-0061 札幌市中央区南一条西6-11 札幌北辰ビル8階 ☎ 011-231-0403
東北支社 〒983-0852 仙台市宮城野区福岡4-3-10 仙台TBビル4階 ☎ 022-742-1213
名古屋支社 〒464-0802 名古屋市中区星が丘元町14-4 星ヶ丘プラザビル6階 ☎ 052-789-1741
大阪支社 〒550-0013 大阪市西区新町2-10-16 ☎ 06-6531-5782
九州支社 〒810-0075 福岡市中央区港2丁目1番5号 FYCビル3階 ☎ 092-733-0174